

女性たちのつながり

対談 レティシア・コロンバニ vs 中江有里

(司会…浜田敬子)

翻訳・編集 伊藤達也

浜田 本日の司会を務めます浜田敬子です。⁽⁹⁾オンラインのニュースサイト『ビジネス・インサイダー・ジャパン』の編集長をしています。大学を卒業して三十年あまり、特に『アエラ』という雑誌で、仕事をする女性の問題をずっと取材してきましたので、レティシア・コロンバニさんの『三つ編み』と『彼女たちの部屋』にはとても共鳴して、いろんな側面から読ませていただきました。本日はお話をうかがえるのが楽しみです。⁽¹¹⁾対談のお相手は女優、作家の中江有里さんです。まずお二人から簡単に自己紹介をお願いしますでしょうか。

コロンバニ レティシア・コロンバニです。対談に参加できて光栄です。自分の著書が翻訳され、日本の皆様が気に入ってくださっていると聞いて嬉しく思います。私は二十歳で脚本家、俳優、監督として映画の世界に入り、『愛している、愛していない』、『スターと私』と二本の映画を製作し、二〇一五年に『レジスト』というミュージカルの脚本を書いた後、小説を書いてみようと思い、最初の小説『三つ編み』を書き始めました。今から五年前です。私はこの小説を一人の友人、そして多くの勇気ある女性へのオマージュとして書きました。その時はこんなに世界中の皆さんに喜んでいただけたとは思ってもみませんでした。昨年フランスで出た『彼女たちの部屋』も今年日本語に訳されました。今後も女性について書き続けたいと思っています。

中江 中江有里です。私は十五歳で女優として仕事を始め、今は小説も

書いています。書く仕事を始めたのは、二〇〇二年からで、ラジオドラマの脚本から書き始めて、エッセイ、コラムなど様々なジャンルの文章を書いていきます。本を読むことも好きなので、自分で感銘を受けた本をテレビで紹介したり、書評をしたりしています。コロンバニさんの『三つ編み』はテレビの番組で紹介し、『彼女たちの部屋』も書評で取り上げました。私が少しコロンバニさんに似ているな、と思ったのは、多岐にわたって表現にたずさわっていること、表現にジャンル分けはしていないことではないかと思っています。

二作に込めた思い

浜田 それではまずコロンバニさんに二作に込めた思いをお聞きたいです。

コロンバニ 数年前から、それまでの映画の仕事を通じて、女性を作品に登場させたい、女性の登場人物を創造したいという気持ち強く持つようになりました。私は常に女性の置かれた立場には敏感でしたが、数年前に自分自身が女の子の親になり、より一層女性の問題に敏感になりました。娘が将来どういう世界で生きるのか、平等で公正な世界で生きて欲しいと強く願いました。また親友が重い癌になり、ウィッグを選びに行ったことがありました。その際インド人の髪で出来たウィッグを見た時に、この髪の背後には語られるべき物語があると思ったのです。インドで髪を提供した女性がいて、今その髪を私の親友がかぶっている。そこに世界に生きる女性たちの物語があると思ったのです。『三つ編み』は髪によって三人の女性がつながる話です。インド、カナダ、シリアの社会的地位の違う三人の女性の運命が髪によって紡がれていく話です。シミタはインドの不可触民で、激しい差別にさらされています。カナダのサラは女弁護士でキャリアのトップにいます。シリアのジュリアはウィッグ工場の若い労働者です。私はこの物語を書いていくうちに、今後この方向で女性の生きる道を語り続けたいという思いを強くし、『三

女性の生き方を描く

『編み』が出版される前から『彼女たちの部屋』を書き始めました。

浜田 先ほど娘さんが生まれてから、女性の問題により敏感になったとおっしゃいました。実は私にも中学生の娘がいて、子供が生まれるまでは全く男性と同じように仕事をしていましたが、子供が生まれることにより、時間が制約され、そこから女性の生きづらさを感じるようになりました。それをきっかけに女性の取材を始めるようになったので、とてもコロンバニさんのお話に共感しました。中江さんはこの二作をどう読まれましたか？

中江 まず『三つ編み』は、コロンバニさんがおっしゃった通り、それぞれ同じ時代に生きているとは思えない、境遇もバラバラな三人の女性が、まさに三つ編みが編まれるように、髪というキーワードで繋がって



いく、その構成がまず素晴らしいと思います。そしてそこに行く自然な流れですね。先ほどコロンバニさんの親友が癌になったとの話をされましたが、私も母が昨年癌になりウィッグを選びに行ったことがあります。私はその時『三つ編み』のことを思い出したんです。ウィッグからコロンバニさんが『三つ編み』の話を思い出したということ、そこから始まる世界にとっても共感しました。その髪は誰かから来た髪です。そ

の循環の中で私たちは生きているということですね。残念ながら今は年々なくなってしまったのですが、私も母から命を受け取って今ここにあります。女性は循環の中で生きていることを感じずにいけない、特に命を産み出す存在として、非常に共感しました。それから『彼女たちの部屋』は、続けざまにお書きになったということで納得したのですが、パリの舞台にして、百年の月日を隔てた二人のヒロインが登場します。先ほどの『三つ編み』は同時代ですが、『彼女たちの部屋』のヒロインの一人はソレーヌという現代のキャリア・ウーマンとして頂点の女性で、もう一人は百年前に実在した、ブランシュ・ペイロンという救世軍に入るといふ特殊な道を選んだ女性です。この二人が結びついていくところ、『三つ編み』と共通の構成を感じました。ただただでなく、物語としてもっと深い、特にラストが、これ以上は読んでいただいた方が良いでしょうけど、とても上手いなと思いました。ただ構成がうまいだけでなく、テーマがしっかりとしています。恵まれない女性、思いがけない不幸に見舞われた女性をどう救うのか、その救い方が素晴らしいと思いました。

見えない鎖

浜田 『三つ編み』では同時代の国と境遇の異なる女性、そして『彼女たちの部屋』では時代の違う女性を登場させていますが、いつの時代どの国でも女性の置かれた境遇というものに共通するものを感じました。特に『三つ編み』のインドの話が現代の出来事なのか、と思うくらい強く印象に残りました。インドという遠い世界の話はどのようにして書かれたのですか？

コロンバニ 若い頃、いろいろ旅をし、本を読み、好奇心に導かれて、世界中、アジア、南米で女性たちに会いました。そこで気づいたのは、どこにいようと、女性は鎖をつけられているということです。それが目に見える場合もあり、目に見えない場合もあります。例えばフランス、

カナダでも理論的には女性性は平等を勝ち得ていますが、職場でも家庭内でも見えない鎖があります。家事は七〇%が女性、三〇%が男性と、実際には平等には程遠いです。インドでは鎖は目に見えます。生き残るために戦わなければなりません。この女性の闘争を目に見えるようにするために私は小説を書きました。『三つ編み』では不可触民の女性を出しました。『彼女たちの部屋』ではソレーヌはフィクションの人物、ブラシユ・ペイロンは実際の女性でした。また路頭に迷う女性も出しました。彼女たちはともに戦い続けたのです。『彼女たちの部屋』ではブラシユ・ペイロンにオマージュを捧げたいと思いました。

中江 鎖が見えないということは、皆に意識されていないということ、女性自身も意識していないのかもしれない。先ほどフランスでは家事は女性が七〇%ということでしたが、日本では九〇%かもしれない(笑)。子供がいれば、子供の世話はどうしても女性の仕事になってしまい、結婚や出産は女性のキャリアの中断につながります。法律があっても、社会が許してくれません。企業などでは男性は育休をと、と政府が投げかけでも、取れていません。例えば政治家が育休をとると、国民から政治家が休んでいいのかと批判が起こったりします。女性は結婚すると、ひと昔前は、仕事を辞めていた時代もありました。『三つ編み』の中でも、弁護士サラは癌になった時、会社での立場を失います。頂点にいるときには弱者の立場は見えないわけです。弱者の立場にはなりたくてなるわけではありません。子供を作ること、病気になることは生きている一つの営みですが、それをきつかけに、弱者と見なされ、社会から外されていく。サラが病気に罹ったことを言えないというのはとても辛いですね。『三つ編み』見かけ上、フランスの女性性は男性と同じ権利ですが、実際にはそうではありません。中江さんが言われたように、妊娠でキャリアを中断すると、職場や家庭内での差別、不平等が加速します。政府は女性の仕事と家庭を両立できるようにすべきだと思います。北欧は男女の平等においては先を行っていて、幸福度も高いです。スウェーデンで働く女性社長のインタビューを読んだのですが、彼女が十七時に仕事を終

えて家に帰ると、効率良く仕事をしたと評価されますが、他の社会では仕事をしていないと見なされます。私は楽観的な性格で、フェミニストで、ヒューマニストですので、人間の平等は必要で、それが可能なものと考えます。そのためには社会のあり方を変えなければなりません。より多く男性が育休を取れるようにし、保育園を作り、女性が子供を預けられるようにすべきです。そういう面においてフランスはスカンジナビアと比べて遅れています。

女性たちの動き

浜田 私たちから見るとフランスは相当進んでいるように見えるのですが、それでもコロンバニさんはまだまだだと思っていらっしゃる。日本はこの三十年少しづつしか変わっていないくて、悲観的になることも多いのですが、エンターテイメントの世界でも、コロンバニさんの『三つ編み』がこれだけベストセラーになる、また世界を見るとここ数年、井上メト運動が起きたり、韓国の小説で『82年生まれ、キム・ジョン』が売れるなど、社会に変化が起きていると思います。エンターテイメントの世界でもアカデミー賞で男優賞や女優賞という区別をなくそうとか、審査員のジェンダー比率を見直そうなどの変化が起きている。

中江 それはやはり意識の問題だと思います。長年刷り込まれてきてそれが当たり前だと思っている。例えば女性がキャリアを中断しなければならぬのも、自分ですべてを抱え込んでしまうことにあると思います。

『彼女たちの部屋』のソレーヌは仕事に打ち込んで、ひとつ失敗をして鬱になってしまふ。それは彼女には完璧でなければならないという縛り付けを持っていてそうになってしまふ。そこで、他人のために何かやってみればと、アドバイスを受けて、代書屋の仕事につくわけですね。女性には、人のために、子供のためにやりすぎて、自分のためが後回しになってしまふことがあると思います。人のため、仕事のためが美化されています。浜田 井上メトも、そういうことをしないと仕事がなくってしまふか

ら、しかたがないんだ、ということ、多くの女優さんたちが表に出せなかった。小説や映画の世界でフェミニズムが台頭してきている、この変化をどう思いますか。

コロンバニ 先ほど言われた#MeTooも含め、世界全体の女性の大きな運動に関われたこと、女性の問題に本を通して貢献できたことを光榮に思います。女性がようやく言葉を発し始め、ノーと言い始めました。女性たちはやつと、もう沈黙しない、もう服従しない、と言い出したのです。中江さんが、女性は他人を優先し、時として自分の存在を消してしまふ、とおっしゃいましたが、まさにその通りで、女性は他人の世話をし、子供の世話をしています。女性には自分を忘れないこと、自分の欲望、自分のアイデンティティを忘れないことが必要です。#MeTooは重要な運動で、女性はやつと自分の言葉を持ちました。この運動から世界中で多くの希望が生まれています。そして一人一人がこの運動の中で演じるべき役割があります。

シスターフッド

浜田 私がコロンバニさんの小説を読んで希望を感じたのは、シスターフッド、つまり女性たちの連帯です。『三つ編み』では三人の主人公が会うわけではないですが、読んでいる私たちの中に連帯感が生まれます。そして『彼女たちの部屋』では本当にシスターフッドが生まれていく。女性たちはいろんなものを超えて、仲良くなる能力が高いと思いますが、そのあたり中江さんはどのようにご覧になりましたか？

中江 シスターフッドの気持ちは、私もわかります。日本では最近、マウンティング女子、マウンティング男子という言葉がありますが、マウンティングするのはどちらかというと男性が多いと思います。それは男の人たちは競い合うことが企業の中で求められているからじゃないかと思うんですね。女性はマウンティングしているようで、そんなにしていないのではないかと思います。みんな一緒に頑張ろうという気持ちが強

い。それぞれの立場は違いますし、望むことも違うんですけど、あなたが望むことは応援したいよねという立場でいると私は思います。

浜田 シスターフッドについてコロンバニさんにもおうかがいしたいです。まさに『彼女たちの部屋』はそれがテーマだと思いましたので。

映画やドラマの中の女性

コロンバニ 中江さんと同じようにシスターフッド、女性たちの連帯を信じています。それこそが私の小説の中心テーマと言っても良いでしょう。まず『彼女たちの部屋』を書いた時にあった一番重要な動機は、映画やテレビドラマにはこの小説の登場人物のような女性たちが登場しないということでした。女性が表象されていないのです。中江さんは女優としての経験をお持ちなので意見をおうかがいしたいのですが、私はあらゆる年代の女性が登場する脚本を書きたいのです。ところがフランスのテレビドラマには女性は五十歳を過ぎると登場しなくなります。二十代―三十代は取り上げられます。私は女性の脚本家として、あらゆる年齢の女性が場所を持つべきだと思いますし、舞台でもテレビでも小説の中でも、女性がもつと登場すべきだと思うのです。

浜田 中江さんは演じられる方ですが、ドラマでの女性の役について、脚本家が男性か女性かによっても違うと思いますか？

中江 私は決して男性が書けないとは思いませんが、実際には、コロンバニさんがおっしゃったように、ヒロインは二十代―三十代が多いです。四十代―五十代は、誰々のお母さんとしてしか出ていません。クローズアップしてもらえないんです。実は六十代―七十代になっても女性には母親以外の生き方がある、私は今四十代後半ですが、その後にもっと深く一人の人間としての人生があるのと思っています。私は女優でもあり、作家でもあるのでそういうテリトリーでやっていきたいと思っています。

女性の共感力

浜田 シスターフッドに加えてもう一つ、コロナバニさんの小説を読んで私は、女性たちの共感力も感じました。私は今日本の企業で管理職をやっていて、部下の女性たちも管理職になりつつあるのですが、女性は共感力やコミュニケーション力が高く、他に管理職をやっている女性を見ても、注意深く管理職をやっていて、むしろ女性にはリーダーが向いているのではないかと思います。メルケル首相もコロナの対応などでも素晴らしいスピーチをされました。

コロナバニ 共感力についてはブランシュ・ペイロンを通じて表現したいと思いました。彼女は人生のすべてを他者に捧げました。女性は偉大な共感力を持ち、その力は企業にとって、あるいは政治の世界でも有益だと思います。同時に注意しなければならないのは、メダルには裏側があるということです。中江さんが言われたように、女性はあまりに共感力が高すぎるために、他者の欲望の前に、自分を消してしまいがちなのです。そのことに注意し、他者を尊重しながら、うまくバランスを保つべきです。

教育の重要性

中江 個々のものの考え方は生まれ育った環境に影響されていて、私たちの世代は刷り込まれたものがあります。それを変えるためには、これからどういう風にすべきか、それを下の世代に見せていくことが大事だと思います。私には子供がいらないのですが、妹の子供の甥がいて、彼には次世代を生きていく中でバランスの良い少年になって欲しいと思っています。社会を変えなければいけないのはその通りですが、社会を作っているのは人間なので、私たちの一人一人の考え方が変わっていけば、社会に影響を及ぼす可能性があります。浜田さんが日本は三十年変わらなかったとおっしゃいましたが、少しは変わった部分もある、そ

こは希望なんです。それを信じることは無駄じゃないと思います。

浜田 よくアンコンシャス・バイアスと言いますが、それを解き放つ、それを次の世代に伝えない、たち切るために、意識されていることはありますか？

コロナバニ はい、おっしゃるように子供の教育のテーマは重要です。この点でも女性は大きく貢献できます。私には娘が一人だけですが、男の子がいたら女性に敬意を表する、男女平等の意識を持った子供に育てます。子供を育てるときに、無意識に不平等の意識を伝えてしまっています。最近旅行した中国で多くの女性と話しましたが、他の国とは違う子育ての仕方に驚かされました。中国では男の子と女の子では教育が違います。男の子には贈り物をし、女の子には家の手伝いをさせます。小さい頃からこうでは、社会が変わっていきません。少しずつ平等にしていくのが良いのではないのでしょうか？



コロナと不平等

浜田 今、世界を覆っているのがコロナで、日本でも感染が拡大しています。私も取材を通じて、社会的弱者に影響が出ていることがわかってきました。女性、特にシングルマザーが困窮しています。またエッセンシャルワーカーにも女性が多いです。

コロナバニ コロナ禍は不平等を深めました。不安定な状態にあった人たちはさらに不安定になりました。女性の貧困は進み、シングルマザーなどはますます守られていません。『彼女たちの部屋』で書いたのは、女性たちが社会の最前線において、貧困にさらされていることです。かつて私は素朴にも弱い人々は社会によって守られると信じていたのですが、現実にはそうではありません。現在、NGO、救世軍、フードバンクなどが懸念を表明しています。なぜならコロナは弱者をより弱者にしているからです。またロックダウンで家庭内暴力が増えています。女性が被害者になっているだけでなく、あるドキュメンタリーによると、家庭内暴力の子供に対する影響は極めて大きく、女性に対する暴力はすなわち子供に対する暴力でもあるのです。フランスではこの問題について非常に心配されています。

浜田 日本でも、通常自殺は男性の方が多いのですが、コロナになって夏以降は女性、特に若い女性の自殺が増えています。

中江 コロナになってからの若い女性の自殺の増加には大変ショックを受けました。今までは自分が経済的に困っていることは、表に出づらく、隠し続けてきたことだったと思います。コロナで世界中がダメージを受けたことで、それがあつけない表に出てしまった。日々生活していたのが、明日食べるものもない、住む家も失ってしまった人たちがいるということに、ショックが大きかったです。社会の不平等がはつきりしたのは、それまで見えなかったことが剥がれて見えるようになったことでもあります。

浜田 実は私たちはシングルマザーの支援もしていましたが、貧困だけ

でなく、意外だったのは、相談する相手がないという声が大きかったことです。まさに『彼女たちの部屋』に描かれるシエルターのようなもの、日本にはその規模のものがありませんが、セーフティネットが必要だと思っていた。

中江 自分が必要な情報をどこで得られるかということがわからないのが一番辛いことだと思います。必要な情報がどこに行けば得られるかという情報がすぐに広まる、これからはそういう社会を作っていかなければ、救われるものも、救われません。

好きな小説

浜田 それではこの辺りで質問に移りたいと思いますが、質問に入る前に、お二人の好きな小説を教えてくださいませんか。

コロナバニ 何人もの好きな作家がいます。シモース・ド・ボーヴォワール、アニー・エルノー、ヴァージニア・ウルフ。ウルフのエッセイ『自分ひとりの部屋』は書くためには自分の空間が必要だと言っています。『彼女たちの部屋』でも引用しています。さらに最近のものではシェリル・サンドバーグの『LEAN IN』（リン・イン）女性、仕事、リーダーへの意欲』ですね。サンドバーグは、フェイスブックの経営者の女性ですが、この本の中でどのように女性が平等を獲得していくべきかを語っています。彼女自身、競争の熾烈な世界で男性と肩を並べるために猛烈に働きました。この本が興味深いのは、現代的な男女平等のマニフェストだからです。

浜田 私も読みました。あれだけ能力も地位もある女性が仕事から早く帰るとき、裏口から帰るといったのを読んだとき、まさに『三つ編み』の弁護士サラのようだと思います。アメリカのエグゼクティブの女性たちもこういうことで悩んでいるのだなと思いました。中江さんも何冊か持ってきていただいていますね。

中江 はい、私もコロナバニさんのお話にも出たヴァージニア・ウルフ

の『自分ひとりの部屋』をお薦めしたいです。

浜田 すごく付箋が貼ってありますね。

中江 そうです。付箋貼りまくりです（笑）。私も物を書くので、女性が物を書くのには、お金と自分一人の部屋が必要というのは共感しかないです（笑）。具体的には、自分一人になれる空間が必要で、その一人になる空間をコロナで失った人が多いと思います。読書は読んでいる時間が自分の空間なので、自分の部屋なんだということですね。あともう一冊は、最近出た村上由佳さんの『風よ、あらしよ』、明治大正時代の女性解放運動の伊藤野枝の評伝小説ですね。本当に女性が抑圧されていた時代に、こういう風に女性が戦ったか、彼女が子供の頃から持っていた情熱に圧倒されますね。

浜田 先ほどからそれを持つてらっしゃるのを見て気になっていました。年末年始に読んでみたいとお思います。



小説と映像

浜田 ではこれから、お二人に質問です。小説を書くときに映像が思い浮かびますか、それとも写真や絵のような静止画ですか？

中江 バニ 私は映画の世界にいたので書くときは映像、シーン、状況が見えています。私は常に人物を具体的な出来事の中に登場させるように努めています。今でも覚えているのは、『彼女たちの部屋』では、初期の段階では、ソレーヌが燃え尽き症候群に陥り、鬱状態であることが内面的に描かれすぎていました。そこで最初の章でクライアントの一人が飛び降りるシーンを描きました。そうすると、このトラウマのせいで燃え尽き症候群が起ったことがわかるのです。これは私の仕事のやり方ですが、私は常に登場人物の精神状態を、ある具体的な状況を通じて表そうとするのです。

浜田 確かにあの最初のシーンは衝撃的で、パツと映像が浮かびました。また『三つ編み』でスマタが子供をおんぶして髪を切りに階段を上って行くところでも、映像が頭に浮かびました。

中江 自分が小説を書くときも画を浮かべていますね。私は自分が登場人物に入り込んで、この場で自分ならどうするかを思いうかべながら書くので、そこを書くまで何を書くか全くわからないで書きます（笑）。そういう意味ではとてもスリリングなんですよ。自分がわかっていたら書いていてつまらないとは思いませんか。

中江 バニ 私の場合は、登場人物が私を導いてくれます。『三つ編み』の場合、最後はわかっていましたが、途中はどうなるのか全く決めずに書き進めました。『彼女たちの部屋』では登場人物たちが自由に動くので私は驚かされっぱなしでした。小説を書くことは旅のようなもので、一日として同じ日はありません。今も九時から十六時まで自分の部屋に閉じこもって毎日書いていますが、一日として同じ日はありません。先がどうなるかわかりませんし、書くことはまさに冒険です。

創作と取材

浜田 私たちは取材して書く仕事なのですがだいぶ違うなと思いました。ジャーナリズムでは人に取材して、その人が世の中に発することができない言葉を、記事を通して世の中に届ける。小説の場合は仮想の人物になりきって書く、登場人物に導かれるという言葉はとても面白いですね。中江 浜田さんがおっしゃった、相手の発する言葉を観察することについてですが、私は普段、書く前はずっとそうしています。コロンバニさんも普段からインスピレーションを受けた人の観察をいつもなさっていますか？

コロンバニ はい。書く前は何ヶ月も取材をして記者のようにノートに書き込んでいます。私はこの取材の段階が大好きです。それは発見の段階だからです。私は好奇心の強い人間なので普通なら行かないところに取材に出かけるのが好きです。最初の映画『愛している、愛していない』では病院の心療内科に行き、精神分析家や患者に会いました。『三つ編み』の取材の時はインドに行き、不可触民が住む村を訪れました。『彼女たちの部屋』では女性会館（パレ・ド・ラ・ファム）に何度も行きました。アフガニスタンから来た女性など多くの人にインタヴューをして、集めた素材を用いて登場人物を作っていました。私はこうして自分のテーマに浸っていくのです。

『三つ編み』の映画化

浜田 面白い質問が来ています。『三つ編み』の三人の主人公の中で演じたいのはどなたですか？

コロンバニ 実際にはいいですね。『三つ編み』は現在映画化されている途中で、二〇二一年に撮影される予定です。私はすでに脚本を書きました。撮影はまだですが、私が出るとすると、カナダで脇役をするくらいでしょうか。役者さんたちがこのプロジェクトにどのような貢献をし

てくれるか楽しみです。現在主人公三人のキャストینگを始めているところです。その中に私が入ることはないでしょう。

中江 映画化されるんですか、楽しみです。私は年齢的に無理がありませんけど、スマタですね。不可触民で、人の糞尿を集め、食料を恵んでもらっている。そして六歳の娘に自分と同じ人生を歩ませないためにそこから脱出する人です。私は彼女の行動力に胸を打たれましたね。髪を切った時の神々しい姿、読んでいて文字から光が溢れるような気がしました。

インドの不可触民と出会って

浜田 そのスマタに関連して、コロンバニさんに質問ですが、当事者でない立場からインドの不可触民にどうアプローチしたのですか？

コロンバニ インドには何度も行きました。最初の旅では不可触民には会えませんでした。何度も行くうちに不可触民の人々と友情を育むことができました。それからドキュメンタリーを何時間も見ました。何年か前にはネズミを取る不可触民の男性とも出会いました。これらの活動によって不可触民の生活を想像できるようになりました。昨日も不可触民が学校から追い出されるドキュメンタリーを見ましたが、二〇二〇年の今日まだ「不浄」という理由で学校に行かせてもらえない子供達がいることに涙があふれました。今執筆中の本はそれについて書いています。インドは美しい国ですが、暴力的でもあり、いろいろな問いを突きつけてきます。

小説のタイトル

浜田 『三つ編み』のタイトルはいつできましたか？ 最初からあったのでしょうか。

コロンバニ 良い質問ですね。この小説のタイトルは最初『髪の話』で

した。原稿を見た編集者はすぐに変えた方が良いと言っていました。

いよいよ小説が印刷される直前になって何か見つけなければならなくなり、私は小説の初めに『三つ編み』の定義を書いていたので、編集者から『三つ編み』ではどうかと提案されました。最初は『三つ編み』ではシンプルすぎると思いましたので、慣れるのに時間がかかりました。

中江 今ではこれ以外考えられないくらいピッタリなタイトルですね。気になったのは、日本では三つ編みはポピュラーですが、フランスでも三つ編みにするのですか？

コロンバニ フランスでもポピュラーです。私も髪が長かったのですと三つ編みにしていました。女性が三つ編みを編むのは普遍的なことです。娘がこの本のフランス版の表紙を見たとき、「ママと私だ」と言いました。写真を見て、女性は娘に三つ編みを編んでいると感じるのではないのでしょうか。

アイデアの記録

浜田 日頃からアイデアノートを持ち歩きますか？

中江 私はiPhoneに書いています。インスピレーション、アイデア、言葉、状況、物語の種になるなと思ったことは全部を書き込んでいます。コロンバニ 私も同じで、小さいノートに興味を示したこと、状況など何でも書きこんでいます。十五年前のノートに不可触民について書いていました。二〇〇六―二〇〇七年に髪を捨てる寺院のことについて書いていました。『三つ編み』を書いている時にそのメモがみつかりました。いろんなノートに十年後、二十年後にアイデアをもたしらしてくれるかもしれないことが書かれています。

小説の舞台について

浜田 『三つ編み』の舞台は、インドとイタリアはわかりませんが、なぜか

ナダなのですか？

コロンバニ 最初は舞台の一つはフランスでしたが、三つの違った大陸に登場人物を置きたかったのです。またフランスとイタリアでは近すぎると思います。弁護士を北米におきたかったのは、ドラマなどでも、競争の厳しい社会でキャリアを積む女性として北米の女弁護士がフィーチャーされるからです。またこの女性が引ききかれています。示すために、ヨーロッパとアメリカの中間にあり、二つの文化が混ざり合ったモントリオールを舞台に選びました。北米にありながら、フランス語圏のモントリオールはフランス的な特徴を残しています。

バーンアウトを乗り越えるには

浜田 次の質問です。『彼女たちの部屋』で主人公が陥る「燃え尽き」症候群の経験はありますか？そしてそれを乗り越えるためにどうしたら良いですか。

中江 そこまでの規模ではないですが、次はどういいのか悩む時期はありました。時間がかかりましたけれども、そういう時はルーティンを作ることが救いになった気がします。特別なことや刺激の強いことに触れていると日常の自分を忘れてしまいます。日常に帰った時に、生きている感覚を感じ得なくなってしまう。あらためて自分のルーティンの生活をするのが一番力になるんだと気づいて、それでようやく立ち直れたことがあります。朝起きてご飯を食べ、運動をする。規則正しい生活、人間的な生活です。それまではどうしても仕事柄、朝早かったり、遅かったりしてリズムを刻むのが大変だったのです。

コロンバニ バーンアウトはないと思いますけど、非常に大きな人生の見直しに直面した時がありました。三十九歳の時です。十五年間映画の世界に身を置いてきたのですが、失敗の感覚に捉えられました。いくつか計画を出しましたが、一つとして実現できませんでした。映画の世界、その資金集めはとても特殊で複雑です。私は大きな失敗の感覚に陥り、



すべてやめてしまおう、脚本家、俳優のキャリアを捨ててしまおうと思いました。それはとても苦しい経験でした。なぜなら、私は十八歳で映画学校に入り、この夢の世界であまりにも長い時間を過ごしてきたのです。私はこの夢が崩れ去ったと感じ、何か別のことをしようと思いました。そこで何もしないサバティック・イヤーを一年取り、小説を書き始めました。それが『三つ編み』で、全く自分のために書いたのです。初めは、自分の人生に再び意味を与えるためでした。編集者を探しましたが、それは作品を書き終えるためでした。目的は映画の夢が潰えたとしても、別のことで創造性を発揮して生きていけると示すことでした、幸い脚本を書いたミュージカルが演じられていたので、一年間著作権で生

きていくことができました。『三つ編み』が出版され、これほど読者に支持されるとは思いませんでした。この時の休みが、新しい扉になりました。最初の小説は自分の職業人生の辛い時期の終わり、それまでのキャリアを諦めなければならない状況で書かれたましたが、今言えるのは、時として失敗は新しい扉を開くきっかけになるということです。

中江 つまずきつて、けして無駄ではないですよ。見直す機会になります。コロナバニさんも自分のために書く。私も最初にものを書いたのは自分のために書いたんです。これは誰に読まれなくてもいい。本当は読んで欲しいけども(笑)。でも自分が納得するものを書いてみようとする、最初に動機はそこから始まっていたので、今コロナバニさんのお話をうかがって胸が熱くなりました。

コロナの前と後

浜田 これはお二人に聞いてみたいです。コロナ前と後で何か変わりましたか？ またコロナが創作に影響を与えていることはありますか。

コロナバニ コロナで、私は仕事の仕方を変えませんでした、生きかたを変えました。フランスでは春に続き今もロックダウンですが、そのことで今この瞬間に生きることを学びました。私は計画をきちんと立てるタイプだったのですが、現在は今を生きることの大切さ、日常生活のちよつとしたことに幸せを感じます。今後は旅ができなくても、娘、夫と家族として、不安定の中でも今を生きる幸せを学びました。ただ書いていくことには集中しています。創作活動は変えませんでした。

中江 私は今まで一人でいる方が好きで、人との関わりに疲れることが多かったのですが、コロナで人と距離を取らなければならなくなつて、実は自分は人と関わりたかったのだと気付きました。人と関わる事は、自分を揺るがすこともあるので、今までは人にどこか怯えていて、人との関係に縛られることが怖かったのですが、コロナで人と関わるのが大事だと知りました。今もずっと感じています。浜田さんとも、コロ

ンバニさんともハグしたいような気持ちです(笑)。

希望のメッセージ

浜田 ありがとうございます。最後にこの対談を聞いている方に希望が持てるようなメッセージをいただけますでしょうか。

コロンバニ 私が子供の頃に読んで、人生を通じてずっと共にあり、助けられてきた一つの文章をお伝えしたいです。ジャン・コクトーの一文です。「Ce qu'on te reproche, cultive-le, c'est toi. (あなたの中にある、人がとがめる部分を耕しなさい、それはあなたなのだから)」というものです。それは常に私がそばに置いている言葉です。

中江 素晴らしい言葉の前で私が締めるのも申し訳ないですが、私はコロンバニさんのこの二冊に勇気をもらいました。コロナ禍の中でコロンバニさんにもお会いできませんでしたが、心はいつも隣にいますということをお伝えしたいです。本当にいい小説で、女性だけでなく、重要な役割で男性も出てきますので、男性の方にも読んでいただきたいです。コロンバニ この対話に感謝します。一日中話していたい気分でした。いつか日本に行ったらお会いしたいです。ありがとうございます。

(9) 浜田敬子(一九六六年) ジャーナリスト、作家。『NERA』元編集長、オンラインジャーナル『ビジネス・インサイダー・ジャパン』前統括編集長。著書に『働く女子と罪悪感』『こうあるべき』から離れたら、もっと仕事は楽しくなる』(二〇一八年、集英社)。

(10) Laetitia Colombari。(一九七六年) フランスの小説家、脚本家、映画監督、俳優。映画高等専門学校を卒業後、脚本家、監督、俳優として映画の世界で活躍する。オドレイ・トトゥ主演の『愛してる、愛してる』(二〇〇二年)の監督・脚本、『スターと私』(二〇〇八年)の監督後、ミュージカル作品『レジスト』(二〇一五年)の脚本を共同執筆した。映画界から文学界に転身し、小説『三つ編み』(二〇一七年、邦訳)二〇一九年、齋藤可津子訳、早川書房)がフランスで百万部

を超えるベストセラーに。日本でも、海外文学として初めて、書店員が選ぶ新井賞を受賞。続く第二作『彼女たちの部屋』(二〇一八年、邦訳二〇二〇年、齋藤可津子訳、早川書房)でフェミニズム作家としての人気を不動のものにした。二作品は世界中の三十以上の言語に翻訳されている。

(11) 本対談はアンステイチュ・フランセ日本の主催による第十三回『読書の秋』の一環として二〇二〇年十一月二十一日、十八時―十九時三十分(日本時間)にアンステイチュ・フランセ東京にて開催されたオンラインライブイベント『対談 レティシア・コロンバニと中江有里』を書き起こしたものである。掲載の許可をいただいたアンステイチュ・フランセ東京、アリアンスフランス愛知フランス協会、レティシア・コロンバニ氏、中江有里氏、浜田敬子氏に感謝します。

(12) 中江有里(一九七三年) 俳優、作家、歌手。著書に『結婚写真』(二〇〇六年、日本放送協会、二〇一〇年、小学館文庫)、『わたしの本棚』(二〇一七年、PHP研究所)、『残りものには、過去がある』(二〇一九年、新潮社)、『トランスファール』(二〇一九年、中央公論新社)など。NHKBS2『週刊ブックレビュー』で長年司会を務める。現在NHK『ひるまえはっと』でブックレビューを担当。